

(英語版)

(アラビア語版)

(目次)

見果てぬ平和 ― 中東の戦後75年(二十一)

第一章 民族主義と社会主義のうねり(五)

二十一・戦後ゼロ年…アラブ連盟の結成(二―二)



ともあれ戦後ゼロ年の中東諸国の状況は次のようなものであった。まず中東の三大国と言われるトルコ、イラン及びエジプトのうち、トルコはすでに述べたとおりオスマントルコが崩壊したのち小アジアとイスタンブールから成る共和国に変身、七紀から連綿と続いたカリフ制を廃止し世俗主義国家として近代西欧諸国を模範に国家建設に励んでいた。イランはコザック兵出身のレザー・ハーンが1921年のクーデタで実権を掌握したのち自らパハラヴィー朝皇帝を名乗り、国名をペルシャからイランに変更し、親西欧的な独裁君主制国家として戦後を迎えている。中東三つ目の大国エジプトはオスマントルコから半ば独立したムハンマド・アリー朝が第二次大戦を生き抜いたが、イギリスが強い影響力を維持していた。その他の中小国はイラク、ヨルダン、パレスチナが英国の委任統治を受け、シリア、レバノンがフランスの委任統治下に置かれていた。

英仏の支配を免れた唯一とも言える例外はサウジアラビアである。同国は1932年に「サウジアラビア王国」を樹立、アラビア半島の大半を支配下に置いて独立を保った。同国が独立を維持できたのは英仏がアラビア半島そのものの戦略的価値を重視しなかったからにすぎない。

実はサウジアラビアの価値に気付いていたのは米国であった。第二次世界大戦開戦早々の1941年に米国の石油会社がサウジアラビア東部に巨大油田を発見していたからである。ただ米国はサウジアラビアを植民地化するような愚を犯さなかった。将来の石油の価値を正しく認識していた米国はサウジアラビア原油の安定確保に動いた。第二次大戦終結間際、ルーズベルト大統領がヤルタ会談直後、帰国を延ばしてまでスエズ運河の船上でサウジアラビア国王アブドルアジズと会談した真意はそのことにあったのである。

(続く)

荒葉 一也

E-mail: Arehakahazuyal@gmail.com